

新着資料展 ～民俗～

会期：4月3日（水）～29日（祝日）

平成24年度にあらたに受け入れた博物館資料から、4月は民俗分野の主な寄贈資料を展示します。

一軒の家に残されていた御札おふだ

お正月に神社や寺院からいただく御札は、一年間お祀りしたらお焚き上げて毎年取り替えるのが通例です。ですから古い御札はあまり残りません。ところがごく稀に毎年の御札を貯めておく家があります。当館ではすでに岡崎の沼田直司家から三代にわたって貯められていた御札が寄贈されています。昨年暮に、その二例目として秦野市堀山下の大木伸男家から膨大な数の御札が寄贈されました。昭和50年頃に母屋を解体した際に、厨子（屋根裏）から見つかったもので、量にして茶箱2箱と段ボール2箱分ののぼります。整理途中につき全貌は明らかにできませんが、御札の枚数は優に千枚を超えます。御札には大木家5代前の当主の名も記されていることから、少なくとも150年分くらいの御札が貯められていると思われます。なぜ大量の御札が貯められていたのかは不明ですが、御札の移り変わりや一軒の家がどんな社寺を信仰していたのかを詳細に知ることができる、一級の地域資料になりうると考えています。



寄贈時の御札と大神宮祠

太子講用具たいしこう

太子講とは聖徳太子を信仰する講で、建築関係の職人たちによって組織されます。当館初めて、東太子講から太子講用具が寄贈されました。元々は大野東部太子講といい、八幡、四之宮、真土の職人で構成していました。講仲間は20人程度で、正月22日に当番宅で例会を開き、床の間に聖徳太子の掛軸をかけ、商売繁盛や無病息災を祈りました。昭和30年代には正月の他に、6月に旅館で懇親会を開き、9月に須賀で遊船会を行うのが恒例で、信仰とともに職人仲間の親睦が図られていました。しかし、仲間の高齢化で6人に減り、昨年5月に解散しました。



聖徳太子の掛軸

日本刺繍ししゅうの施された帯・刺繍道具

現在の着物や帯にほどこされた刺繍のほとんどが機械刺繍であるのに対し、日本刺繍はすべて手作業で針を刺していきます。そのため、その作品はたいへん貴重で高価なものです。同様に日本刺繍の技術を持つ職人さんも稀少な存在です。寄贈者の錦織フミさんは、帯や着物へ日本の伝統刺繍をほどこす仕事を長年続けてこられた方です。作品と刺繍の道具を展示します。優美で繊細な日本刺繍の魅力を味わってください。



孔雀と鴛鴦くじく おしどり